

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
平成三十一年四月一日
省特別換承認誌第六二七号
（第百二十二卷第四号）

ホトトギス

四月号



風雅の小筥〔十五〕

廣太郎

このコーナー「十三」で、一字一句辞書を確かめてはどうか、という事を申し上げたが、どうも職業柄細かい事が気になるのかも知れないが、今回も文字について、最近実際経験した事を踏まえて申し上げたいと思う。

各地のホトトギス大会に参加すると、最近清記の方法が、特に西日本に多いのだが、決まった清記の係が居られるのではなく、投句した方に、それまでに投句された他の方の投句短冊と清記用紙を渡して、投句者全員に清記をしてもらう、という方法をよく見掛けるようになった。中には文字を書くのが苦手な人もおられるだろうが、ある大会に参加して、其処はこの方法の清記であった。私も文字に関して悪筆極まりないのだが、字を書く事自体は結構好きで、この日も進んで清記をさせて頂いたところ、私に手にした投句短冊の一枚に「小春日秋」なる文字がはつきり書かれているのを発見した。歳時記でも私の知る限りこの言葉は無く、作者が考えられた新赛季かとも思い、勿論そのまま清記用紙に書き写したが、これはどう考えても「小春日和」の「和」の字を書くつもりが、先ず「禾」と偏を書いて次に旁を「口」としななければならないところうっかり「火」を書いてしまった、という事は想像に難くないだろう。前述「十三」で、一字一句と申し上げたところが、今回はその一字の中でも漢字における偏と旁の問題も最近垣間見られるようになった。細かい事で恐縮であるが、やはり投句の時は、文字を確かめるのは当然として、投句の寸前までよく読み返す事も重要になってくるだろう。

句日記 汀子

平成三十年四月一日 下萌句会

日本中あれよあれよと花満ちて
花の旅予定狂ひてをりしこと
花終りたるを覚悟の花の旅
庭中の花といふ花咲く四月

四月二日 ロイヤル俳壇

こんなにも長閑なりけり一人住
うすすすとあり春の月なりしか
道々のどこもかしこも花の景
この陽気一氣に花を誘ひけり

四月十日 荻屋ホトギス会

体調をゆだねたるより日永かな
蝶飛んでをり快方に向かふ朝
行春やいつもの元氣とり戻す

四月十日 大阪倶楽部

早々と咲き終りたる桜かな
辺りより風音立ちて竹の秋
玻璃越しの囀庭へいざなへる
終りたる花に旅路の残さるる
咲くものに散るものに春惜みけり
花待つてくれぬ旅路となりしこと
癒えてなほ体のどこか春の風邪

四月十日 綿業倶楽部

又戻り来たる狭庭の蝶の昼
考への先へ先へと蝶飛んで
みよし野の花に遅れをとりけり
体調のととのへゆくも日永かな
会一つ休みて日永余しけり

四月十二日 清交社

春の雲渋滞抜けてをりにけり
ぶらんこに乗れば近づく空のあり
春の雲少し離れよと咲き終る
初桜あれよあれよと咲き終る

つひに空覆ひ尽くせし春の雲
初桜より旅心添うて来し
四月十三日 工業倶楽部
誰もぬぶらんこ乗つてみることに
渋滞を抜けて青空春の雲

四月十四日 吉野くつろぎの旅

新緑の風に包まれ吉野山
吉野路の残花の景をつなぐ旅
目つむれば花の吉野の絵巻物
目よし野に静けさ戻る緑かな
花も終へ鳥も鳴かざる吉野山
はるばると来しみ吉野は花終へて

四月十四日 第二句会

花終へし吉野の宿の山の幸
春灯下夜の時間の過ぎ易く
關下りて新緑の山一枚に

四月十五日 第三句会

みよしの緑の雨もよからずや
新緑の吉野の雨に宿りして
高僧も投句集めて花の宿

四月十五日 第四句会

柏餅宿の長子の育ちたる
帰路は又残花をつる旅ならむ
行春の吉野になごり尽きざりし

四月十七日 有恒俳句会

寒暖の定まらぬ日の蝶の昼
蝶飛んで日差誘へる午後となる
み吉野の緑の旅路ふり返る
旅終へて日永の家居くつろげる

四月十七日 無名会

春風や午後は崩るるてふ予報
桜には遅れを取りし旅路かな
咲き残る桜孤高でありしかな
咲くものに散るものに春風の添ふ
咲き残る黄桜もはや散りそめし

変幻の色も散つてしまひけり
咲き継ぎし桜も散つてしまひけり
四月十八日 夏潮句会
ライラック咲くまで待てぬ旅心
庭師来てはならざるもよき仲間

四月十八日 河野美奇縁

黄桜もさくら色して散り急ぐ
旅共にせしが話題のライラック
又一人花の失ひし春の逝く
み吉野の花の旅路は又のこと
四月十八日 河野美奇縁
苦しみを解かれたる野に遊ばれよ

四月二十日 アネモネ句会

覚悟してあししが悲しき春の雨
亡き君に捧げん春の花沢に
悲しみの心に集ふ春灯下
友の訃に日永刻々ありにけり

四月二十一日 句会と講演の会

ファイリピンの旅共にせし友の春
消えてゆくもの春光もその一つ
もう逢へぬ友よ春光あまねき
甦りたる健康を春光に

四月二十六日 さざさき会

悲しんでならぬ春返す会なれば
御遺影にほほえみ返す春の句座
ぶらんこに会話行つたり来たりして
居る筈の彼女はいつこ春の野に

四月二十七日 時雨句会

春眠にゆだねし愈け心かな
空席となりし春灯明うせよ
淋しさも悲しさも又春の行く
又同じ朝の始まる葱坊主
我家今日悲しきときの桜鯛
忘れ得ぬ思ひ出幾つ春惜む

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年四月一日 野分会戸屋例会

競漕や湖使ひ切つてをり
春陰を燭の剥がしてゆきにけり
競漕の歴戦語るオールかな
春陰を払ひ大祝日の弥撒
春陰に確と聞きたる神の声

四月一日 青嵐会戸屋例会

思ひ出は都踊に出会ひし妓
吉野よりは都踊へ直行す
轉に和す鎌倉の忌日寺
虚子館の庭囀に目覚めゆく
復活を祝ぐ囀でありにけり

四月五日 蕉心会

落花敷きつめて大川らしくなる
うららかや鶴は波に乗り風に乗
花見船帰路は急いでをりにけり
杉花粉思考溶かしてゆきにけり
桜鯛釣れさうな竿捌きかな
春昼の隅いよいよ純白かな
芭蕉記念館長四月より佳人

四月七日 芦屋ホトギス会

芝桜佳人の靴が拵げゆく
永き日を東京芦屋鎌倉に
初蝶の天使の涙より生るる
行春の富嶽は白を解かざる

四月八日 虚子忌

鳶の笛楽となりゆく虚子忌かな
大切な人の姿の無き虚子忌

忌日寺てふ長閑なる異空間
四月九日 朝日カルチャー若草句会

麗かな歳月重ねね忌日寺
春愁や来るべき人の来ぬ忌日
落花舞ふ宇宙狭めてゆきにけり
一片の落花忌心載せて消ゆ
春愁はワイ恩三本あれば解け

四月十日 むさし野吟行会

残花なほ日表といふ輝きに
飛鳥山花の余韻を地に留め
桜葉降る満開の記憶秘め
鶯の声に覚めゆく遊歩道

四月十二日 土筆会

古巢てふ命の歴史ありにけり
魂の抜け出しさうな朝寝かな
どうしても古巢気になる一羽かな
遠景に藤烟らせて苑閑か

四月十三日 志摩角美様句集序句

百年の花守として寿
四月十四日 吉野くつろぎの旅

亀鳴くや一目千本青々と
騎馬武者の声閉ぢ込めて水温む
その上のその上の上より落花
今晩の食材沈め水温む
思ひ出は枝垂桜の散りてなほ
一本の残花車窓を画布として
句心は花見弁当食べてよ

四月十五日 北國文芸選考者吟

散り敷けば落花は句碑の伽として
桜餅吉野の色と味と香に
石楠花の色に明けゆく吉野かな
春灯に甲州ワイン蕩けゆく
春愁を吹き飛ばしたる朝餉かな
来年の花は女将が引き留める
世を憂ふ後醍醐帝か春の雨

春時雨吉野の魂を鎮めゆく
四月十九日 登高会

又一人春の闇へと連れられて
潮騒はあの日の調べ桜貝
もう会へぬ人みよし野の春の闇
別れくとは唐静二人静かな
淋しくて二人静の名を持てる

四月二十一日 ホトギス社句会

これよりは春光溢る天国で
聖ヴァイオレット春光携へて
葬儀ミサへとつゝ咲く街道を
散り急ぐ吉野も羽音もその中に
躑躅咲く人も羽音もその中に

四月二十二日 青嵐会東京例会

公園の雀も犬も春惜む
行春や偲びて余りある人に
風光る時大薨鎮もれる
空中に留まる羽音暮の春
行春の天を突き刺すタワーの秀

四月二十二日 野分会東京例会

競漕に青春賭けて恋知らず
春陰や悼む心を持ち寄りて
名苑の人の出春陰払ひゆく
四月二十三日 悼十八日河野美奇様御逝去

四月二十五日 目黒学園句会

天上の董野に今着かれしか
四月二十五日 目黒学園句会

突出しの海雲は店の自慢とも
昭和の日零戦模型作りし日
朝顔を蒔いて大地を動かしぬ
隣国は近くて遠し昭和の日
朝顔を蒔いてより観察の日々

四月二十六日 若水句会

神の国へとこでまりの白さもて
こでまりに天使の羽を遊ばせて
行春や時間止めたき時もあり

雑詠 廣太郎 選

散紅葉昨日に今日を重ねゆく
 龍ヶ崎 今橋眞理子
 帰り花かき消して空青くなる
 同
 真青なる空の瑕瑾の如く鷹
 同
 もののけの一人混りぬ闇汁会
 東京 田丸千種
 闇汁に魚屋からの届け物
 同
 闇汁や虫も殺さぬ顔をして
 同
 遠景に小春近景にも小春
 神戸 和田華凜
 鳩潜る水輪おいてきぼりにして
 同
 白無垢も花魁もよき羽子板市
 同
 紅葉山迷彩服の良く目立つ米子
 米子 中村襄介
 狗鷺の獣を攫ふ鷺掴み
 同
 遅れ着く神有月のバツカスは
 同
 闊歩するあやとり橋や秋晴れて
 長岡 安原 葉
 北国や晴迷さじと冬支度
 同
 庭二分して散紅葉散黄葉
 同
 春の月みるみる海のやうに空
 東京 今井肖子
 来世には人になりたしうかれ猫
 同
 海苔桶の岩場にひとつ人見えず
 同

甦る六十余年露の塔
 神戸 千原叡子
 語部は虚子さんと呼び濁酒
 同
 どびろくに過去忘れさす力無く
 同
 初硯百壺歳を念じつつ
 同
 双六を広げてひとり句を案ず
 同
 七種の日を俎板の喜びて
 同
 木の实降る浅き眠りの底に降る
 同
 藍色に銀色に冬近き海
 同
 冬めいて庭の果実は鳥のもの
 同
 故里の真つ暗がりの虫時雨
 福山 竹下陶子
 戦場の月を仰ぎて寝しことも
 同
 塹壕の仮寝の月に父母を
 同
 小鳥来る十六歳の敦盛に
 神戸 藤井啓子
 義経の転げし坂や木の实落つ
 同
 祈るかに句を詠む司教木の葉降る
 同
 底冷の底百畳のがらんだう
 奈良 古賀しづれ
 禅林の落葉一枚許さざる
 同
 青写真昭和貧しく面白く
 同
 黄は影も軽しと捨つる冬の蝶
 香川 湯川 雅
 大琵琶の芯に時雨れて竹生島
 同
 底冷や抜け落ちさうな高瀬舟
 同
 萍の紅葉はじまるころを旅
 熊本 岩岡中正
 秋の虹ぐり菩薩に会ひにゆく
 同
 浮寝鴨昨日のかほで目覚めをり
 同

雑詠句評(三月号より)

露けしや色の褪せたる鏡板 東京 山田閨子

「鏡板」にはいろいろな場面が使われているようで、能舞台の松の描かれている背も鏡板の一つ。普通は家屋の框や額縁などに入れた一枚板として使われるが、どちらにしる「色褪せたる」という措辞から相当年数も経っているのは確か。だからこそ「露けしや」の季節が語っていることは深く、その古い、しかも色褪せた「鏡板」に特別な想いを抱いている作者なのだ。母許の旧家のことだろうか。鏡板には懐かしい傷跡もあるのかもしれない。どんだん想像が膨らむ。「露けしや」の季節が齎すものは大きく深い。(むつみ)

神社等に設えられている野外の能舞台である。歴史が古く、由緒ある舞台が想像出来るが、古今名だたる能楽師がこの舞台で演じて来たのだろう。今では鏡板に描かれた老松も色褪せているだろうが、そんな中でも幽玄の世界が今でも繰り返らられているのが季節を通して想像出来る。(廣太郎)

懺悔室へと置いてくる秋思とは 神戸 和田華凜

プロテスタントにはないが、カトリックの教会には、神父様を通して自分の罪を告白(告解)し神に赦しを乞うための小さな懺悔室がある。この句は「秋思」。「春愁」とはやどこか異質の、深く人生に関わる、宗教的根源的な悩みの「秋思」である。

末尾を「秋思とは」と終えて、深い余韻がある。この「とは」という問いは、他者へ、そして己自身に向けられる。こう問いかけて、「人間とは」「罪とは」と深く己に問いかける作者の後ろ姿が浮かび上ってくる。

この句、「秋思」を「懺悔室へと置いてくる」と、秋思を形あるもののように詠んだところが、いかにも俳句的でリアルな存在感があり、ここに自然な工夫がある。(中正)

懺悔室とも言うが、特にカトリックでは赦しの秘跡という重要な恵みである、自分の罪を司祭に告白する儀式ではあるが、教会の端に設えてある小部屋を懺悔室という。司祭はその告白された罪は決して口外出来ない。告白、つまり懺悔をした信者の心境が余すところなく語られている。(廣太郎)〈以下略〉

天地有情

夕月の疾うに沈みし山の黙
 たちまちの霧に包まれたる二人
 著莪咲いてみよし野時を重ねゆく
 夕闇を拒む吉野の著莪豊
 老とてもはづむ心や初電話
 年玉を貰ひに來ればよきものを
 老の足木の實一つに躓くも
 しやんとして生きねば老のそぞろ寒
 着ぶくれるにも神戸流芦屋流
 旧友は地球の裏にクリスマス
 捨てられて天を仰いでゐる案山子
 戦国の色して枯れてゐる芒
 掛乞も女将の腕の見せどころ
 行きつけに思はぬ掛を乞はれけり
 輪番は座主の後裔露けしや
 なほざりと言はず千草の庭とこそ
 快癒てふ祈り深めつ聖夜待つ
 御快癒の兆し受話器の声小春

長岡 安原 葉
 同 同 稲畑廣太郎
 東京 同 後藤比奈夫
 神戸 同 木村享史
 相模原 同 和田華凜
 神戸 同 岩岡中正
 熊本 同 三村純也
 神戸 同 千原叡子
 同 同 水田むつみ
 宝塚 同

花八つ手むかし見しままにも咲いて
 干物売る店並びゐて花八つ手
 老友のごとくに冬の日が親し
 山を見てをりて今年も暮るゝかな
 表札の残る空家の柿落葉
 綿虫や更地となりし空家跡
 いたはられゐてふと淋し初しぐれ
 花八手ゆらし自転車出てゆきぬ
 たちのぼる紫煙の記憶立子の忌
 墨跡のみづみづしさよ立子の忌
 どうしても冬木の道を歩きたし
 自転車を止めて冬野の中にある
 菊展に文化の香りありにけり
 神前の腕白の子ら七五三
 山かけて淡海へかかる時雨虹
 いくたびも湖国のしぐれ旅果つる
 妻恋ひのしきりに仰ぐ冬の星
 共白髪果たせぬままに木の葉髪

熱海 嶋田 一步
 同 同 中杉隆世
 群馬 同 大久保白村
 東京 同 今井千鶴子
 同 同 今井肖子
 同 同 浜崎素粒子
 神戸 同 竹下陶子
 福山 同 山田閨子
 東京 同 赤川誓城
 仙台 同

金子選